

アートと、 アーテイストに、 出会う夏

インタビュー「アートの交差展」



この夏、郡山市立美術館で開催される「ゆらめく日常 アートの交差展」。若手作家によるアートの企画展は、当館では初の試み。企画誕生から展覧会の見どころまで、担当の富岡学芸員に聞いた。

【企画誕生の準備】

「まず、展覧会の概要を教えてください。」

富：「今回は、20代〜30代の日本の4人の若手作家による感性と情熱に溢れた展覧会です。絵画、インスタレーション、立体、映像といった様々なジャンルの作品約50点が展示されます。」

「この展覧会を立案したきっかけは？」

富：「当館では、平成20年まで「青木繁記念大賞公募展」という洋画の公募展を開催していました。その替わりとして、現代アートを自主企画で取り上げようという話が内部で上がり、私自身も興味があったので、やってみよう」という事になりました。」

「ゆらめく日常 アートの交差展」という展覧会名は？」

富：「悩みましたよ！初めは「アート発見伝」という名前でした。夏休みの展覧会なので、親子連れで楽しんでもらえる展示にしたい。そのうち、出品作家が固まってきたところで、表現方法の違い4人が一つの空間に集まることで見えてくるテーマがあると感じました。それは、環境問題とか地球規模の壮大なテーマ、というよりは、日常的なものだと思っただのです。日常に潜むふとした疑問や、日常的なものが見方を変えれば全く別のものになる不思議など...そういった「日常」と「アート」の

交差」という意味があります。もう一つは、「観客とアートの交差」という意味です。今まで観たことのないアートに接することによって、何か新たな発見があるのではないかと。そこから「アートの交差展」になり、「ゆらめく日常」という作家さんたちに共通した「コンセプト」を加えたわけです。ほかには「@アート」などの案もありました(笑)」

「はじめにタイトルありきではなく、だんだん「日常」というテーマが見えてきたのですね。では、今回の4人の作家さんには、どうやってたどり着いたのですか？」

富：「今回20代〜30代という若い方をお願いしたのは、これからの可能性を秘めた人を取り上げたいという思いがあり、また自分と同時代の人であれば、色々と時代的にも共感できる部分が多いと思っただからです。美術雑誌で調べるほかに、現代の若手作家さんは大抵自分のホームページなどを開設していますからそういうものも見て、面白いと思った人がいると個展を見に行ったりしました。実物を見ないと選定は難しいですね。現代アートは特に、雑誌やネットで見るのと、実際に目にするのでは作品のイメージが大きく違ってきます。個展をやっていない人でも作品を見せてもらったり、映像の人には映像作品を送ってもらったりして、決めていきました。膨大な作家さんのファイルが手元にできて、その中から4人に絞るのは、一番大変な作業でした。」



1「ビー玉の丘」
2007年、個人蔵
油彩、キャンバス 40.8x40.8cm
© Hiroyuki Aoyama /
courtesy of YOKOI FINE ART

2「hanging:サラリーマン」
2008年
石粉粘土、木材、アクリルガッシュ

3「Point Of Contact」
2008年
リヴァールビエンナーレ 2008
"Pop Up" Curated and
commission by Jump Ship Rat
Courtesy: Takuro Someya
Contemporary Art

4「String oscillation」
2006年

出品作家

青山ひろゆき
(1977年生 福島県出身)

北村奈津子
(1982年生 宮城県出身)

タムラサトル
(1972年生 栃木県出身)

野口久美子
(1983年生 熊本県出身)

